

## ウルグアイ大統領選挙：安定した民主主義を立証 —政党政治が根付く小さくてもキラリと光る国—

眞銅 竜日郎

ウルグアイは政治の年を迎えた。大統領選挙が2019年10月、11月に行われた結果、野党候補のルイス・ラカジェ・ポウ上院議員が当選した。副大統領には、ベアトリス・アルヒモン下院議員が当選した。ウルグアイでは15年ぶりとなる政権交代が2020年3月1日に行われる。

今回の大統領選挙では史上初となる特徴が幾つも現れた。即ち、①最若年となる46歳の大統領が誕生する、②初の女性副大統領候補が当選した、③初の5党による多党連立政権、④初めて過半数を得票しない大統領候補が最小僅差で逆転勝利した、の各点である。ウルグアイの歴史上、初めて尽くしであり記録に残る大統領選挙であった。特筆すべき点は、大統領選挙キャンペーン、予備選挙、第1回投票、決選投票の過程で暴動、騒乱が一切起きず、全てのプロセスが平和裡に完了し、ウルグアイにおける民主主義の成熟度の高さを証明したことである。

### ウルグアイ史上初の僅差の勝敗

ウルグアイで大統領・上下両院議員選挙が2019年10月27日に実施された。大統領の任期は5年である。連続再選はできない。次期大統領就任式は3月1日

である。

5年に一度実施される大統領選挙では、ダニエル・マルティネス前モンテビデオ県知事（与党・拡大戦線（FRENTE AMPLIO:FA）、左派）とルイス・ラカジェ・ポウ上院議員（国民党、中道右派）等の候補が激突した。第1回の選挙結果は、マルティネス候補は39.0%を獲得し、ラカジェ・ポウ候補は28.6%を得票した。第1回投票で過半数を獲得した候補がいなかったため、上位2候補による決選投票が11月24日に行われた。決選投票の結果は、ラカジェ・ポウ候補が48.8%、マルティネス候補が47.4%を得票する大接戦となった。両候補の得票が過半数に達せず、ウルグアイ史上初となる僅差の争いとなった。最終的に選挙裁判所による集計発表が11月30日に行われた結果、白票・無効票が3.8%あり、ラカジェ・ポウ候補が3万7,042票（1.4%）の僅差で逆転勝利した。

ラカジェ・ポウ候補の勝因は、決選投票で5党による野党連合を組んで与党に対抗し、政権交代の必要性を繰り返し訴え続けた結果、与党候補を上回る支持を獲得したことである。国民党のラカジェ・ポウ候補は野党の主要政党であるコロラド党（中道右派）、カビルド・アビエルト（公開参事会）党（右派）、



ラカジェ・ポウ次期大統領、眞銅大使（執筆者）上院議員執務室



マルティネス知事、眞銅大使 モンテビデオ県知事執務室  
（提供：在ウルグアイ大使館）

独立党（中道）、人々の党（中道右派）の5党を束ねて決選投票に臨んだ。その結果、野党連合が与党候補を僅差で上回って逆転勝利を収めた。与党のマルティネス候補は第1回投票でラカジェ・ポウ候補を10ポイント上回る約4割の票を獲得しながら、第2回の決選投票では野党連合を組まれて僅差で敗れる苦杯を味わった。

### 変化を唱え続けて勝利

大統領選挙では経済、治安、教育、人材育成等が主な争点となった。しかし、与野党間の政策方針に大きな差異はみられず、15年の長期間に及んだ与党・拡大戦線（FA）に対する国民の不満と飽きが野党連合への投票を増やした。ウルグアイはタバレ・バスケス大統領とホセ・ムヒカ前大統領が率いる穏健な中道左派政権が、3期15年にわたり治世を行ってきた。ウルグアイはラテンアメリカの中では治安のよい国であると評価されるが、それでも近年は窃盗、強盗等の犯罪が増加している。南米における貿易のハブ・センターであるモンテビデオ港で大量の麻薬の密輸が摘発されるなど、市民は以前と比較して治安の悪化を肌で感じている。ラカジェ・ポウ候補は国民が身近に感じる不満と不安に焦点を当てて現政権を批判し、変化を唱え続けることで勝利を掴んだ。

### 強い指導者になれるかは未知数

ラカジェ・ポウ次期大統領は、1973年生まれの46歳。父はラカジェ元大統領、母はフリヤ・ポウ元上院議員。政治家一族の出身で政界のサラブレッドで

ある。趣味はサーフィンとラグビー。ブリティッシュ・スクールではラグビー部に所属した。前回2014年の大統領選挙で立候補したが、バスケス大統領に敗北した。今回の選挙で雪辱を果たし、念願の大統領に当選した。ラカジェ・ポウ次期大統領は見栄え良く能弁である。現実主義的思想を持ち、人脈構築と交渉が上手との定評がある。これまでの職歴では下院議員と上院議員を務めるが、大統領の資質として求められる行政経験がない。ラカジェ・ポウ次期大統領が5党の多党連合体で成り立つ新政権を統率する指導力、行政能力があるかどうかは未知数である。ラカジェ・ポウ候補が率いる国民党の得票は30%に過ぎず、過半数には遠く及ばない。幸いなことに、ウルグアイは嘗て国民党とコロラド党の2大政党が



旗を振る支持者 首都・モンテビデオ（提供：在ウルグアイ大使館）



バスケス大統領、眞銅大使 大統領公邸（写真提供：大統領府）



国民党支持者集会 首都・モンテビデオ（提供：在ウルグアイ大使館）

連立政権を組んだ治世を経験しており、国民の間に連立政権に対する拒否反応はない。年齢が若いラカジェ・ポウ次期大統領は強力なカリスマ性を持たないことから、老練な他党の党首に配慮を示し、5党の意見を調整しながら舵取りする政治手法を採るであろう。政権が交代しても基本的な政策方針は維持される見通しである。100年以上に及ぶ歳月を掛けて民主主義による統治を育んできたウルグアイが政治的混乱に陥る事態には至らないとみられる。

### 経済政策は自由貿易を重視

ラカジェ・ポウ次期大統領が率いる国民党の政策は、企業、経営者を重視するビジネス派である。ラカジェ・ポウ候補は選挙期間中、変化と政権交代を訴え続ける戦術を採り、与党の批判に専ら注力して具体的な政策パッケージを提示していないが、主要経済政策としては、歳出削減による財政赤字縮小、税金、関税の軽減、実質賃金の維持等を採用するとみられる。対外政策では、自由貿易を標榜し市場開放政策を重視している。ウルグアイは“GATTウルグアイ・ラウンド”で歴史に名を遺す実績で知られるとおり、自由貿易分野でイニシアティブを発揮する国である。ラカジェ・ポウ次期大統領の実父であるラカジェ元大統領は、1990年代にメルコスール（南米南部共同市場）の発足に貢献した。息子のラカジェ・ポウ次期大統領は、農業、牧畜、林産品等を主要輸出品目とするウルグアイの自由貿易政策を推進する見通しである。国・地域では右派の連立政権はブラジルとの関係を強め、ベネズエラ、米州ポリバル同盟等の左派政権と距離を置く政策を志向すると予想される。日本とウルグアイは基本的価値を共有する友好関係を築いており、新政権の対日政策に大きな変更はないとみられる。

### 多党連立政権の協力が不可欠

ラカジェ・ポウ次期大統領は、政権交代の必要性と変革を訴えて政権奪取に成功したことから、議会対策をはじめ5党間の協力と調和を前面に押し出してアピールするであろう。新政権が発足して日が浅いうちに内輪揉めして連立政権が瓦解する事態を招かないよう配慮する必要がある。

新政権の不安定要因を指摘すると、カビルド・アビエルト党のギド・マニーニ・リオス党首の存在である。マニーニ党首は保守的政治家系の出身であり、

陸軍司令官を務めるなど右派を代表する人物である。同氏は2019年3月、軍人の待遇、年金制度等を巡り政府を批判したとしてバスケス大統領により陸軍司令官を解任された。マニーニ氏は同年3月に結党したカビルド・アビエルト党から大統領選挙に立候補し、第1回投票で11.0%を獲得して与党FA、国民党、コロラド党に次ぐ第4党の座を占める躍進を示した。今回の大統領選挙で野党連合が逆転勝利できた主な理由はカビルド・アビエルト党の急進であり、同党が獲得した票が与党FAを敗北に追い込んだ。キャスティグポートを握るマニーニ党首は陸軍司令官を解任された屈辱を、自らが立ち上げた新党を躍進させ政権交代を実現することにより晴らした。マニーニ党首は右派、軍部、貧困層等、幅広い分野から支持を集めて勢力を拡大している。ラカジェ・ポウ次期大統領は、百戦錬磨のマニーニ党首への対応に細心の注意を払いながら政権運営を行わねばならない。

### 特筆すべき民主主義の安定度

今回の大統領選挙を通じて特筆すべきは、史上稀にみる接戦が繰り返されたにも拘わらず、暴動、騒乱、テロ事件が発生していないことである。ウルグアイでは過激派が台頭することなく政情は安定し続けている。平穏に政権交代する政治環境は高く評価できる。

ラテンアメリカ近隣国の多くで政情不安、暴動が発生する状況にあるなか、何故ウルグアイは安定しているのか。理由として伝統的な政党政治が根付いている土壤がある。ウルグアイでは国民党とコロラド党の2大政党が100年以上に及ぶ長期間をかけて政党政治を培ってきた。現在は穏健左派の拡大戦線を加えた3大政党政治が定着している。この間、軍事独裁政権の時代があったが、左派の拡大戦線が政権を獲得してもイデオロギーに走らず、暴力を用いる報復を行わず、平和で安定した政治環境の維持を図った。ウルグアイでは政党政治が信頼され国民の支持を受けている。そして、選挙裁判所が選挙制度を所管する機関として完全に独立しており、選挙制度が干渉を受けずに尊重されている。加えて、義務投票制度である点が国民の政治参画意識の醸成に寄与している。

日本から距離的に遠く馴染みの薄いラテンアメリカのイメージとして、政情不安、暴動、テロ、誘拐、

麻薬、経済危機等のレッテルを一様に貼り付ける傾向にあるが、ウルグアイは異なる。ラテンアメリカの近隣諸国で起きている政情不安はウルグアイには当て嵌まらない。

ウルグアイの国際評価比較をみると、民主主義指数、腐敗認識指数、法治指数の各指標でラテンアメリカ諸国中、第1位を獲得している。今回の大統領選挙において暴力行為が発生しなかった実績に照らして、ウルグアイの民度の高さが証明された。政治社会的に安定した成熟国家であることが改めて立証された。

選挙運動中に各党の候補者と支援者は街頭に繰り出して党旗を振り、横断幕を掲げて支持を訴えた。大票田である首都・モンテビデオにてライバル政党が目抜き通りを隔てて相対しても敵視せず、笑顔で応援し合う和やかな光景が印象強く映った。当たり前のように思われるが、大統領選挙が平穏で円滑に執り行われる当たり前の尊さを、選挙期間を通じて観察して実感した。ウルグアイは人口が350万人の小さな国であるが、民主主義の成熟度が高く小さくてもキラリと光るウルグアイに敬意を表する。ウルグアイが育てている健全な民主主義がラテンアメリ

カ全域に伝搬するよう祈念する。

### 外交関係樹立100周年に向けて

近年の日本とウルグアイの関係を述べると、2018年に日本人移住110周年を迎えた。同年12月に安倍総理大臣が日本国首相として初めてウルグアイを公式訪問した。安倍総理大臣とバスケス大統領の首脳会談が行われ、2019年にはウルグアイの主要産品である牛肉の相互輸出解禁が実現した。ラグビー・ワールドカップにウルグアイ代表チームが参戦し、釜石鶴住居復興スタジアムの開幕戦で歴史的な勝利を挙げるなど、両国関係はモメンタムが高まっている。そして、2021年には外交関係樹立100周年の佳節を迎える。将来に向けた両国の絆をより一層強化するため、新しい政権と信頼関係の構築に取り組む所存である。

(本稿は2019年12月6日時点で入手可能な情報を用いた。本稿において意見に関する部分は個人の見解であり、所属する組織を代表するものではない。)

(しんどう たつひろう 在ウルグアイ日本国大使)

## ラテンアメリカ参考図書案内



### 『メキシコ DF テキストとしての都市』

柳原 孝敦 東京外国語大学出版会  
2019年11月 269頁 1,900円+税 ISBN978-4-904575-78-9

多くの文芸・映像作品や文献などから時空を超えて読み説いたテキスト論として、2016年に正式にCDMX(メキシコ市)の呼称が採用されるまでDF(連邦首府)と呼ばれたメキシコの首都を、ラテンアメリカ文学の訳書も多い人文科学者(東京大学大学院人文社会系研究科教授)が、多層な視点から都市論的手法で綴った思索の旅。

征服者コルテスが襲来したアステカの都テノチティトランを思い起こし、大気澄み渡るアナワク(現国際空港に近い地区)から、メキシコ植民地支配の詩情が地下から溢れ出るソカロ、1968年に起きた学生運動を凄惨に鎮圧した記憶の遺るトラテロルコ三文化広場、巡礼地グアダルーペ聖母聖堂、旧市街の市場もあるメルセーとテピート地区、南部の新市街で女流画家にして壁画画家ディエゴ・リベラの妻フリーダ・カーロの青い家のあるココアカン、その少し西のサン・アンヘルは1961年にやってきたガルシア＝マルケスが『百年の孤独』を執筆した街、そして再びセントロに戻り、レフォルマ遊歩道やアメラダ公園界隈を逍遥するが、それぞれの街に関わる実に多くの文学者、詩人、画家などの芸術家が思い起こされ語られており、著者の知見の広さを堪能することができる。(桜井 敏浩)